



医療連携機関の皆様におかれましては、平素より済生会横浜市東部病院をご支援いただき誠にありがとうございます。

2020年度はまさしくCovid-19に世界中が席捲された年になりましたが、新しい年度を皆様はどのように迎えられたでしょうか。

東部病院では、この1年間、Covid-19感染に関しては中等症～重症症例への対応を自らの役割と定め、本年度末までに121名（うち重症例48名）の入院患者の診療を行ってまいりました。病院職員がそれぞれの立場でこの感染症に向き合い、殊に感染患者への直接対応の中心を担ってきたスタッフたちには身内ながら深く感謝するところです。一方で、入院患者の受け入れを開始して以降、院内感染を来さぬように努力してまいりましたが、11月に病棟内クラスター発生を経験しました。その後も2回にわたり一部診療制限をせざるを得ない事象が生じ、地域の皆様にご迷惑をお掛けした事をこの場をお借りしてお詫び申し上げる次第です。

昨年の4月7日に、国内初の緊急事態宣言が発令されました。「来年の今頃にはこの感染症も沈静化し、延期されたオリンピックが無事開催されればいいが…」のように漠然と考えたことが思い出されます。1年が過ぎ、首都圏ではまさに第4波の始まりの気配が訪れる中、どうも私たちは昨年の今頃と変わらぬ場所に立っている感が否めません。感染対策に慣れてきた一方で自粛疲れに苛まれ、ワクチンへの期待と変異株への新たな不安は拮抗しています。医療の逼迫を何とか乗り切り、3か月後に

迫ったオリンピック開催を迎えることは可能なのでしょうか。

先行きの不透明さを嘆いてばかりもいられません。粛々と平時の診療とCovid-19への対応を両立させていくことが、この国難における私達医療従事者のとるべき態度と考えます。感染の波が回を重ねるごとに、感染者数のピークは増加の一途をたどってきていますが、一方でCovid-19への対応医療機関も増加し、「神奈川モデル」に基づく県内の連携体制も円滑に機能しつつあるように感じます。鶴見区内においても第3波のピークとなった1月に病院間でのオンライン会議を行い、感染対策やCovid-19の治療に関する情報交換や患者転送に関する議論を行い、のちの診療に生かされました。これまでも「顔の見える連携」という言葉が重視されてきましたが、オンライン下においても十分に機能することがわかったことは、ある意味収穫でした。Post-coronaの時代に即した新しい医療連携の在り方について、皆様からのご意見やご要望をお寄せいただけると幸いです。

2021年度も、Covid-19との対峙は続きます。東部病院といたしましては、まずは平時における高度急性期病院としての機能、地域医療支援病院としての機能をこれまでと同様に発揮することを目指してまいります。同時にCovid-19に対して病院全体として向き合い、地域の医療・介護が破綻をきたさぬよう尽力してまいります。

末筆ではありますが、連携機関の皆様におかれましては、ご自愛専一に過ごされますようお願い申し上げます。

連携医療機関の皆様

平素より当院の運営にご理解いただき感謝申し上げます。
当院受診の患者さんがいらした際にはお薬手帳をご持参いただくよう
お伝えくださいますようお願い申し上げます。

済生会横浜市東部病院を受診される方へ

受診の際は
お薬手帳の持参も
お願いいたします



外来受診時や入院時には、
健康食品やサプリメントを含めて
いつも服用しているお薬の確認を行っています。

確認が取れない場合は、診療に影響が出ることもあります。
ご協力をお願いします。

済生会横浜市東部病院
問い合わせ先：045-576-3000（代）